

語彙習得研究に基づいた効果的な語彙指導を求めて

Aiming for Effective Vocabulary Teaching Based on Vocabulary Acquisition Studies

外国語科 高木 哲也

1. 研究背景

1. 1. 第二言語習得研究における語彙習得研究

第二言語習得研究における語彙習得研究分野の歴史はそれほど長くない。Nation (2013)によると、語彙習得研究の約 30%が過去 11 年間に行われたものであり、認知心理学の研究分野と比較して実証研究は豊富とは言えず、故に近年ますます注目を浴びている研究分野と言える。単純に「英単語を覚えること」と言っても、英単語には様々な側面がある (Nation, 2001, p.27) が、中田 (2019) が「学習の初期段階では、語形と意味のマッピング (英→日, 日→英) ができることが最優先である」と述べている通り、深い語彙知識を身につける前段階として、いわゆる英単語の意味 (和訳) を覚えることの重要性は揺るがない。「今日では、語彙習得は、英語教育学の 1 つの研究分野として認知されている (相澤, 2014, p.152)」とあるが、特に EFL 環境において、学習者がどのようなスケジュールで復習することが効果的な記憶保持に繋がるか、について検証した実証研究や授業実践は十分に報告されていない。また、語彙習得における最適な学習スケジュールに関する実証研究が増えている一方、一般的に学習者は効果的な語彙学習法を誤解している可能性が高く (中田, 2018, 2019), 授業内外で英語教師による適切な指導が求められる。ベネッセ教育総合研究所による『中高生の英語学習に関する実態調査 2014』では、中学生・高校生のどちらも予習において「単語の意味を調べる」ことが第一位であり、かつ復習において「単語練習」が上位になっている。以上の点を踏まえると、日本の中高生が英単語学習をより効果的に行う方法や、英語教師が授業内で行う指導法を提案することの意義は大きいと考える。

1. 2. 語彙習得研究に関連した知見

近年、第二言語習得研究における語彙習得研究分野が単に増加傾向にあるだけでなく、「より長い研究成果がある認知心理学の知見を応用しようとする動きも高まっている (佐藤・笠原編, 2022, p.58)」。本節では、これまで認知心理学の研究分野や第二言語習得研究の語彙習得分野における先行研究の知見を踏まえて、普段の授業内でより学習効果の高い語彙指導を行うために必要な理論の土台として「分散効果」や「テスト効果」、そして「累積学習効果」を概観する。

1.2.1. 分散効果

集中学習 (massed learning) は「同じ項目を一度の機会で集中的に学習する方法」であり、分散学習 (spaced learning) は「同じ項目について間隔をあけて繰り返し学習する方法」である (佐藤・笠原編, 2022)。一般的には、集中学習の効果が期待される印象を受けるが、認知心理学の研究分野では多くの実証研究が行われており、分散学習の方が集中学習と比較してより長期的な記憶保持につながるということが分かっている。この学習効果を分散効果 (spacing effect) と呼ぶ。これは、近年増加している第二言語習得の研究分野における実証的研究においても同様の効果が報告されている一方、多くの学習者はこの分散効果を理解して学習できていないことが示されている (中田, 2019)。

1.2.2. 最適な復習間隔

認知心理学の研究分野では、古くから最適な復習スケジュールに関する実証研究が行われてきた。Ebbinghaus (1885/1964) が提唱した忘却曲線が示すように、依然として、復習する期間を徐々に広げていくことが長期的な記憶保持に繋がると信じられている風潮があるが、中田 (2018) で批判的に検証されているように、これまで応用言語学や認知心理学、第二言語習得研究の語彙習得研究分野における実証研究の成果から、その効果を十分に示すことはできない。外国語の語彙習得研究において、3つの学習スケジュールの効果が検証されてきた。中田は、長期的な記憶保持に関しては、「回数を重ねるにつれて、復習の間隔を少しずつ広げる」拡張分散学習 (expanding spacing), 「ある学習項目を一定の間隔で復習する」均等分散学習 (equal spacing), そして「回数を重ねるにつれて、復習の間隔を少しずつ小さくする」縮小分散学習 (contracting spacing) という3つの学習スケジュールの間に学習効果の大きな差はない、と結論付けている。しかし、学習事項の難易度が高い場合、最初に復習するまでの期間が長いことで、正しく想起できる確率が下がり、長期的な記憶保持を難しくする可能性がある、と述べている。

1.2.3. テスト効果

近年、「テストは効果的な学習法である」ということが認知されつつある。つまり、「学んだ項目を覚えているかどうかをテストすることで、学んだ項目の長期的な保持が向上する現象 (佐藤・笠原編, 2022, p.68)」をテスト効果 (testing effect) と言い、多くの実証研究で学習効果が報告されている (e.g. Karpicke & Roediger, 2008; Barcroft, 2007)。興味深いことに、全く知らない言語を対象に行った実証実験であっても、学習中に、より間違った学習者において最も学習効果が高かったことが報告されている (Potts & Shanks, 2014)。しかし、一般的に学習者は、テストで間違える利点を理解しておらず、時に間違いを犯す可能性の低い学習法、つまり正答率の高い学習法を好む傾向がある (中田, 2019)。

1. 2. 4. 累積学習効果

認知心理学の研究分野の知見を生かした学習法の 1 つに、累積テスト (cumulative test) が挙げられる。Nakata, Tada, Mclean, and Kim (2021) では、「累積テストでは、学生は直近の学習項目だけでなく、過去に学んだものも含めて問われる “In cumulative tests, students are examined on both recently and previously learned items.”」と定義しているが、累積テストに取り組んだ学習効果は、累積しないテストに取り組んだ学習効果と比べて統計的に有意に高いことが報告されている。さらに興味深いことに、処遇の間のテストスコアでは累積テスト群が一貫して低かったが、遅延テストでは逆転現象が起きていた。さらに、テストに出題されていなかった英単語についても有意にスコアが伸びていた。学習者はより広い出題範囲を学習する機会が与えられ、それぞれの英単語に触れる機会が増えただけでなく、各テストでは容易に想起できなかった結果、長期的な記憶保持に繋がったと考えられる。今後、分散効果やテスト効果を前提に、さらに累積テストを実施することの学習効果について、より多くの実証研究 (他に Kanayama, Iwata, & Kasahara, 2022) はもちろん、実際の中高の英語授業における指導実践が増えることが期待される。

1. 3. 研究課題

普段の授業内でより効果的な語彙指導を実践するために、先行研究から得られた知見を生かし、テスト範囲が徐々に広がっていく (a) 累積 (b) 英単語テストを (c) 定期的に継続して実施した。また、比較的難易度の高い語彙を扱うため、授業始めに学習した内容のテストを次時の授業で実施するのではなく、同じ授業の終わりに実施することで長期的な記憶保持につながるのではないかと考えた。本実践を通して検証する研究課題は以下の 2 点である。

研究課題 1 累積英単語テストを定期的かつ継続して実施することは長期的な記憶保持に効果的か

研究課題 2 授業冒頭で学習した内容を授業終わりに復習することは長期的な記憶保持に効果的か

2. 方法

2. 1. 参加者

首都圏の高等学校 3 年生 2 クラスを対象に、コミュニケーション英語Ⅲの授業内で週に 1 度副教材で扱う英単語テスト (選択式, 各 Unit 15 題) を定期的実施 (7 回) し、全ての授業に出席してテストを受けた生徒 50 名 (A クラス 23 名, B クラス 27 名) を分析対象とした。

2.2. 指導手順

表1は指導スケジュールを示す。先行研究から得られた知見を生かし、日々の授業で、範囲が徐々に広がっていく累積英単語テストを週に1度実施し、10週に渡って継続して実践した。また、扱う語彙は長文読解演習を目的とした副教材「SKYWARD SKY Course (桐原書店)」の語彙リストの内、Word Level Checker 英文語彙難易度解析プログラム (http://someya-net.com/wlc/index_J.html) を使用してレベル分けを行い、JACET8000¹のレベル5以上の比較的難易度の高い語彙を原則として15語ずつ選んだ(資料1参照)。これは中田(2018)で述べられているとおり、英語の和訳を覚えることは学習の初期段階において特に必要である点に加えて、特に中頻度や低頻度語については一対一の和訳を覚えることで十分な場合も多い点を踏まえたためである。

表1: 指導スケジュール

週	授業 (学習)	英単語テスト (Aクラス)	英単語テスト (Bクラス)
1	Unit 14	—	a
2	Unit 15	a	b
3	Unit 16	b	c
4	—	—	—
5	Unit 17	c	d
6	Unit 18	d	e
7	Unit 19	e	f
8	—	—	—
9	Unit 20	f	g
10	—	g	—

注: 4週目は祝日、8週目は学校行事のため授業がなかった。

表2: 英単語テストが網羅する Unit

英単語 テスト	Unit 14	Unit 15	Unit 16	Unit 17	Unit 18
a	○				
b	○	○			
c	○	○	○		
d		○	○	○	
e			○	○	○
f				○	○
g					○

注: 各 Unit 15 題 (選択式) である。Unit 19–20 では実施していない。

また、選択式問題の学習効果は記述式と比較して大きな差がなく、学習効率を踏まえると効果的な学習法であることが示唆されている (Nakata, 2016)。限られた授業時数を踏まえて、選択式問題を採用した。生徒は長文読解問題に取り組む前に、教師と共に英単語・表現一覧 (資料 2 参照) を使用して 2-3 分程度学習した (教師主導によるリッスン&リピート)。長文読解演習後、授業の残り約 5 分程度を使用して英単語テストに取り組んだ。表 2 のとおり、英単語テストは各 Unit 15 問 (1 問 1 点)、最大 3 つの Unit を網羅した累積英単語テストを実施し、それぞれの Unit の英単語テストを 3 回ずつ受けるようスケジュールを組んだ。当初の予定では、最後の累積英単語テストを実施した翌週に、全ての Unit を網羅したポストテストを実施して、ある程度長期的な学習効果を検証する予定だったが、授業の進捗の都合上実施ができなかった。なお、2 つのクラスにおける相違点は「授業冒頭で学習した内容を、同時間の終わりに英単語テストを通して復習する機会があるか否か」であり、A クラスは次の授業でテストを実施したクラス、B クラスは同じ授業内でテストを実施したクラスである。

2.3. 分析方法

結果、多くの生徒は満点を取り続けたため、本実践においては天井効果が見られた。JACET8000 においてレベル 5 以上の語彙を原則とした英単語テストであっても、今回のような選択式問題ではほとんど間違えることはなかったため、学習者のレベルにあった学習内容やテスト形式でなかった可能性が高い。一方、一定数の生徒にとっては高得点を取るのが難しいレベルだったと思われる。そこで、各英単語テストのスコアが 1 度でも 10 点以下であった生徒 6 名 (クラス A : 3 名, クラス B : 3 名) を対象に、英単語テストのスコアの推移を参考に、一連の指導スケジュールが語彙習得に効果的であったか検証した。

3. 結果と考察

表 3 と表 4 は、それぞれのクラスの英単語テストの平均スコアと標準偏差を示す。15 点満点のテストにおいて、ほとんど全てが 14 点以上であり、中にはクラス内の全員が満点を取った回も見られるほどテストの難易度は低かったことが伺える。比較的レベルの高い英単語を対象にしたが、英→日を選択させる形式故に、十分な難易度に設定できなかった可能性が高い。例文等の穴埋めを選択式にすることで多少難易度を上げる工夫の余地があった。また、これまで授業内では、英単語テストを実施したことはなく、生徒にとって新鮮だった印象を受ける一方、少しでも良い点数を取りたい、という雰囲気強く感じた。英単語テストに移る直前に英単語を確認するような生徒もいたように感じたが、評定に繋がる評価に含めないことを明示したうえで実施したため、その点を特別厳しく統制しなかった。この点も、今回の天井効果に多少なりとも影響を与えた可能性がある。

表3 英単語テストの平均スコアと標準偏差 (Aクラス: N=23)

英単語 テスト	1回目		2回目		3回目	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
Unit 14	13.87	1.69	13.13	2.51	14.00	1.51
Unit 15	13.65	1.87	14.30	1.40	14.52	1.20
Unit 16	14.52	1.31	15.00	0.00	14.96	0.21
Unit 17	14.13	1.58	13.74	2.34	14.17	1.56
Unit 18	14.17	1.96	14.52	1.75	14.87	0.62

表4 英単語テストの平均スコアと標準偏差 (Bクラス: N=27)

英単語 テスト	1回目		2回目		3回目	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
Unit 14	13.85	1.54	13.48	2.58	13.89	1.95
Unit 15	13.93	1.64	13.81	1.80	14.22	1.50
Unit 16	14.44	1.15	14.70	0.78	14.63	1.33
Unit 17	13.70	2.11	14.00	1.92	13.93	2.15
Unit 18	14.48	1.15	14.30	1.56	14.33	1.46

次に、15点満点のテストで10点以下を1度でも取った生徒を抽出して、それぞれのUnitのスコアの推移を検証した。表5はAクラスの対象生徒3名について、表6はBクラスの対象生徒3名について示す。なお、Aクラスで2度8点を取った生徒がいたが、その他は全て満点を取り続けたため、検証対象から外した。

表5 英単語テストのスコア (Aクラス)

生徒	Unit 14			Unit 15			Unit 16			Unit 17			Unit 18		
	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目
A1	12	10	12	10	10	13	15	15	15	13	9	10	10	12	12
A2	13	10	14	10	14	13	13	15	15	10	9	15	7	15	15
A3	15	9	10	13	11	10	9	15	15	11	7	11	13	7	15
合計	40	29	36	33	35	36	37	45	45	34	25	36	30	34	42

表6 英単語テストのスコア (Bクラス)

生徒	Unit 14			Unit 15			Unit 16			Unit 17			Unit 18		
	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目
B1	14	9	7	9	10	13	15	14	15	12	12	8	11	13	9
B2	13	15	15	13	10	15	13	15	15	8	8	11	12	13	13
B3	9	9	12	13	10	11	13	13	10	9	13	8	13	15	13
合計	36	33	34	35	30	39	41	42	40	29	33	27	36	41	35

図1—5は生徒A1—B3の各Unitの英単語テストのスコアの推移を示す。Aクラスの生徒は実線、Bクラスの生徒は点線で示す。分析対象生徒が少ないため、統計的分析は行わず、各クラスや各生徒のスコアの推移を質的に分析して考察する。

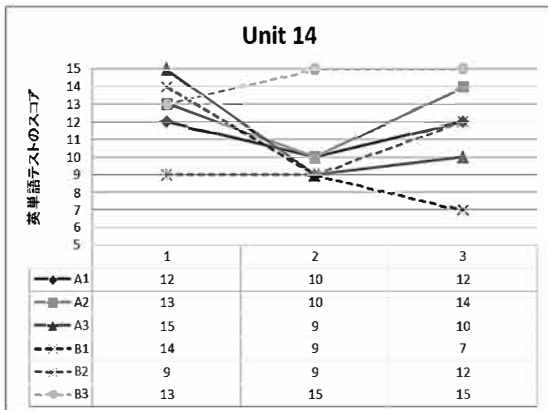


図1 英単語テスト (Unit 14) の点数

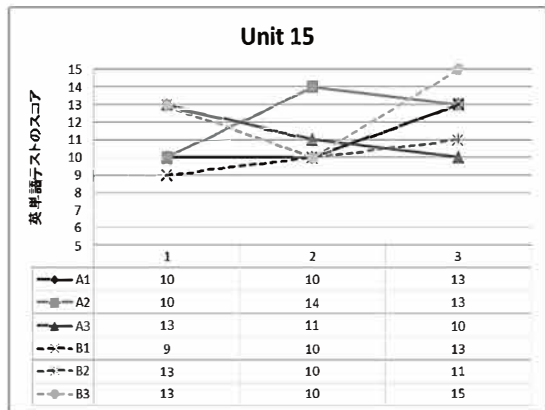


図2 英単語テスト (Unit 15) の点数

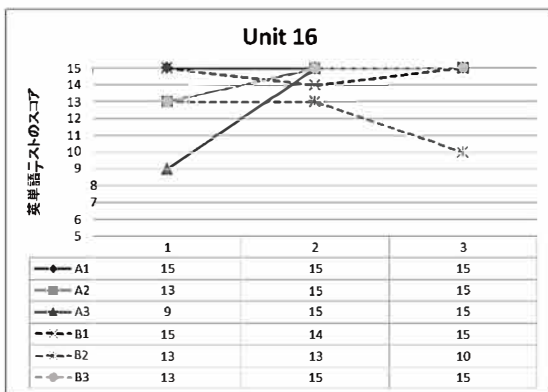


図3 英単語テスト (Unit 16) の点数

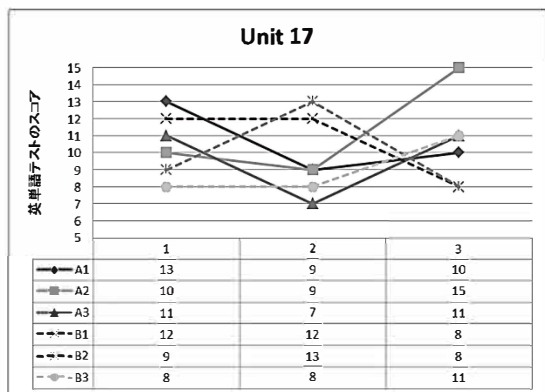


図4 英単語テスト (Unit 17) の点数

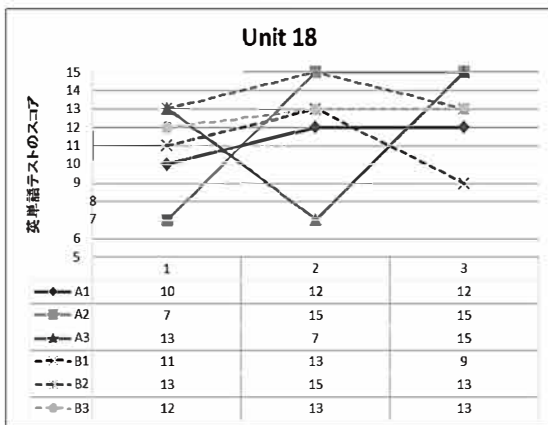


図5 英単語テスト (Unit 18) の点数

Unit 16の英単語テストは、2回目、3回目のスコアがほとんど満点であり、他と比較して難易度が低かったことが伺える。また、本実践における2クラスの違いは「授業冒頭で学習した内容を同時間の終わりに英単語テストを通して復習する機会があるか否か」であったため、各クラスの1回目と2回目のスコアの推移に注目して検証する。中田 (2019) によると、拡張分散学習が記憶保持に効果的である、と唱える理論的背景として記憶を正

しく想起することで、長期的な記憶保持が促進される、という「検索練習効果 (the retrieval practice effect)」と、困難な状態で記憶を想起することで、長期的な記憶保持が促進される、という「検索努力仮説 (the retrieval effort hypothesis)」という2つの理論があり、これらはトレード・オフの関係にある。本実践に照らし合わせると、授業冒頭で学習した内容を同時間の終わりに英単語テストを通して復習する機会があった B クラスは、たった約 40 分後に想起を求められるが故に正しく想起できる確率が上がるが、困難度は下がる。一方、A クラスは、その機会が無く、1 週間後に 1 回目の英単語テストを受けたため想起するための困難度は上がるが、比較的正しく想起できない場合もあったはずである。上述したとおり、本実践では JACET8000 のレベル 5 以上の比較的難易度の高い語彙を対象にしたため、中田 (2018) で述べられているとおり、初めは短い期間で復習する機会を与える B クラスのスケジュールがより効果的な記憶保持を促進するのではないか、と考えた。そこで、各 Unit の英単語テストのスコアの合計 (表 5 および表 6)、および 1 回目から 2 回目にかけて上昇した人数、同じだった人数、そして下降した人数を算出した (表 7)。B クラスは A クラスと比較して、合計スコアが特に 3 回目で下降してしまったように見て取れる。しかし、もちろん一般化はできないが、B クラスのスコアの推移は A クラスのそれと比較して同値または上昇した人数が多いことが伺えるため、B クラスのテストスケジュールの学習効果も示唆された。2 回目から 3 回目にかけてスコアを下降させずに保持することができれば、より効果的な指導になり得る。今後、テストの難易度を調整して、処遇後に遅延テストを実施する実践を行い、同様の結果が得られるか検証することが求められる。

表 7 英単語テストにおける 1 回目から 2 回目のスコアの推移 (N=6)

Unit	A クラス (N=3)			B クラス (N=3)		
	上昇	同	下降	上昇	同	下降
14	0	0	3	1	1	1
15	1	1	1	1	0	2
16	2	1	0	1	1	1
17	0	0	3	0	2	1
18	2	1	0	3	0	0
総計	5	2	8	6	4	5

4. 結論

本実践では、第二言語習得研究における語彙習得研究分野において、先行研究で学習効果が明らかになっているポイントを網羅して、日々の授業内で 10 週にわたって語彙指導を試みた。具体的には、分散効果とテスト効果を土台に、累積学習効果を意図したテストスケジュール、および内容や形式を計画した。研究課題 1 は、「累積英単語テストを定期的かつ継続して実施することは長期的な記憶保持に効果的か」であったが、今回の実践で

は、ほとんど全ての生徒が満点を取り続けたため、実際に累積的に英単語テストを継続して実施した学習効果を測ることはできなかった。研究課題 2 は、「授業冒頭で学習した内容を授業終わりに復習することは長期的な記憶保持に効果的か」であったが、研究課題 1 と同様に、天井効果が見られた結果、実際のところ、その一工夫による学習効果の違いを測ることはできなかった。しかし、各クラス 3 名の生徒を対象に、英単語テストのスコアの推移を質的に検証したところ、スコアの合計点の推移では B クラスの 3 回目の英単語テストにおける下降が見られたが、授業終わりに実施した 1 回目から 1 週間後の 2 回目のテストのスコアの推移を検証すると、B クラスのテストスケジュールの学習効果も示唆された。

5. 教育的示唆と今後の課題

昨今、国内の英語教育において、扱う語彙数の増加は注目の話題の 1 つと言える。語彙指導の際には、受信語彙と発信語彙を区別した指導はもちろん、使用頻度の観点から、特に高頻度語については語法も含めて使用させながら定着させることが肝要である。しかしながら、EFL 環境の日本において、与えられた授業時数の範囲でより多くの英単語を覚えるためには、意図的学習の機会が必須であり、英語教師は最新の知見を踏まえた指導を行うことが求められる。本実践では、その初めの一步を試みた。継続した実践の先には、学習者自身がより効果的な語彙学習法を正しく理解し、授業外で継続して取り組むことが望まれる。以上の点を踏まえると、筆者を含め、多くの英語教師は正しく効果的な語彙指導を行えておらず、学習者自身の努力や学習ストラテジーに頼っているのが現状ではないだろうか。現場では「知識・技能」のみに偏ることなく、「思考力・判断力・表現力」を養う指導が求められているが、そのための土台となる「語彙力」の増強は喫緊の課題である。前述した通り、「英単語を覚える」≠「和訳を覚える」ということは承知しているが、「英⇄日の意味のマッピング」を行うことは英単語学習の第一歩（中田, 2019）と言える。本実践は、これまでの語彙指導を振り返る機会になるとともに、より効果的な語彙指導を中高の英語授業内で行う必要性を唱える点が教育的示唆になり得ると考える。

本実践の課題を 3 点述べる。1 点目は、英単語テストの難易度が適切ではなかったため天井効果になってしまった点である。レベルの高い語彙を対象としても、和訳を選ぶ選択式ではなく、英語を選ぶ選択式や英文の空所補充等の別の形式で行うべきであった。2 点目は、先行研究では累積学習効果を測るために、初めに全てのテスト範囲である語彙リストを配布しているが、本実践ではそのようにはしなかった。実際、生徒は副教材の予習冊子内に語彙リスト（いくつか空所あり）を所持しているが、ほとんどの生徒は使用せずに学習していたはずである。3 点目は、授業内で行った「学習」に多くの課題があった点である。本実践では、語彙リストを共有しながら教師主導によるリッスン&リピートをととした意味の確認が行われたが、手元に語彙リストを持っておらず、十分な「学習」に至ら

なかった可能性がある。また、対象の語彙のスペリングと意味を両方提示しながら行ったため、その部分はテスト効果のない学習になってしまった。英単語を提示後、少し間を置いて日本語を提示するなど、工夫すれば時間をかけずにテスト効果を利用できたはずである。さらに、その後授業内で長文読解演習を行ったが、その際に生徒は付随的に対象語彙を「学習」した機会があったはずである。つまり、語彙指導の学習効果を測るためには「学習」と「復習」の間には別の「学習」要素が入るべきではなく、その点が本実践の学習効果をより曖昧にしてしまった。以上の点を踏まえて、より効果的な語彙指導を模索していきたい。

注

¹ 大学英語教育学会基本語彙改定委員会が作成した語彙リスト（2003年3月作成）

引用文献

- Karpicke, J. D., & Roediger III, H. L. (2008). The critical importance of retrieval for learning. *science*, 319, 966–968. <https://doi.org/10.1126/science.1152408>
- Barcroft, J. (2007). Effects of opportunities for word retrieval during second language vocabulary learning. *Language Learning*, 57(1), 35–56. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9922.2007.00398.x>
- Ebbinghaus, H. (1885/1964). *Memory: A contribution to experimental psychology* (trans. H. A. Ruger & C. E. Bussenius). New York: Dover
- Potts, R., & Shanks, D. R. (2014). The benefit of generating errors during learning. *Journal of Experimental Psychology: General*, 143(2), 644. <https://doi.org/10.1037/a0033194>
- Nakata, T. (2016). Effects of retrieval formats on second language vocabulary learning. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 54(3), 257–289. <https://doi.org/10.1515/iral-2015-0022>
- Nakata, T., Tada, S., Mclean, S., & Kim, Y. A. (2021). Effects of distributed retrieval practice over a semester: Cumulative tests as a way to facilitate second language vocabulary learning. *TESOL Quarterly*, 55(1), 248–270. <https://doi.org/10.1002/tesq.596>
- Nation, I. S. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Nation, I. S. (2013). *Learning vocabulary in another language* (2nd ed.). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Kanayama, K., Iwata, A., & Kasahara, K. (2022). How can cumulative tests be applicable to effective L2 vocabulary instruction? *Annual Review of English Language Education in Japan*, 33, 1–16.

佐藤臨太郎・笠原究(編). (2022). 『効果的英語授業の設計 理解・練習・繰り返しを重視して』 東京: 開拓社

中田達也. (2018). 「復習間隔を少しずつ広げていくことは長期的な記憶保持を促進するか? 先行研究の批判的検証」 『関西大学外国語学部紀要』 19, 35-54

中田達也. (2019). 『英単語学習の科学』 東京: 研究社

相澤一美. (2014). 「語彙学習方法」 全国英語教育学会(編). 『英語教育学の今: 理論と実践の統合』 (pp. 152-155) 東京: 全国英語教育学会

ベネッセ教育総合研究所. (2014). 『中高生の英語学習に関する実態調査 2014』

資料

1 英単語テストで出題した語彙リスト

Unit 14		Unit 15		Unit 16		Unit 17		Unit 18	
語彙	L	語彙	L	語彙	L	語彙	L	語彙	L
confront	4	discipline	3	obscure	4	embrace	3	represent	1
agenda	4	occupation	3	youngster	4	poll	4	content	2
tease	5	consumption	4	nonetheless	4	portion	4	disorder	3
handful	5	expectation	4	inevitable	4	substitute	4	substance	3
misery	5	domestic	4	construction	4	resident	4	symptom	4
notorious	6	manipulate	5	regulation	4	surge	5	mature	4
ignorant	6	contend	6	suburb	5	respondent	5	hazard	5
cruelty	6	problematic	6	annually	5	endure	5	pill	5
cynical	6	workplace	6	unwanted	6	reluctantly	5	extensively	6
bully	7	paradox	6	incredibly	6	fundamentally	6	detector	6
intolerable	7	sophistication	7	prohibit	6	overwhelm	6	mushroom	6
enlighten	—	cram	7	install	6	illuminate	6	isolate	7
impediment	—	stressful	8	inefficient	7	bulky	8	seaweed	—
torment	—	consuming	—	countless	7	gadget	—	magnify	—
cynicism	—	leisurely	—	astronomy	8	boundless	—	allergic	—

注 1: Lは JACET8000 におけるレベルを表す。

注 2: —は Words not in Base Dictionary と割り当てられた英単語である。

2 授業で使用した語彙リスト例

Words & Phrases:

1	fundamentally	副	基本的に	19	pull up ~	熟	~を引き出す
2	fundamental	形	基本的な	20	leave off	熟	中止する
3	gadget	名	小道具, 仕掛け	21	leave A with B	熟	AにBを残す
4	poll	名	世論調査	22	background	名	経歴
5	surge	動	急増する	23	turn O away from ~	熟	Oを~から引き離す
6	respondent	名	回答者	24	bulky	形	かさばって
7	abandon	動	~を捨てる	25	book on tape	名	オーディオブック
8	endure	動	持続する	26	sensation	名	感覚
9	boundless	形	無限の	27	physical	形	物理的な
10	entertainment	名	娯楽	28	delicate	形	傷つきやすい
11	register	動	~を登録する	29	illuminate	動	~を照らす
12	voter	名	有権者	30	substitute	名	代用品
13	overwhelming	形	圧倒的な	31	countless	形	数え切れない
14	portion	名	部分	32	resident	名	住人
15	barrier to ~	熟	~に対する障害	33	reluctantly	副	いやいやながら
16	folk	名	人々	34	part with ~	熟	~を手放す
17	embrace	動	~を受け入れる	35	drawer	名	引き出し
18	a whole lot of ~	熟	たくさんので	36	download	名	ダウンロードしたもの

3 授業で使用した英単語テスト例

English Communication III

SKYWARD Unit 15-17

英単語テスト

Class. No. Name.

domestic		contend		expectation	
workplace		manipulate		occupation	
time-consuming		consumption		leisurely	
stressful		paradox		cram	
sophistication		discipline		problematic	

ア	のんびりした	イ	家庭内の	ウ	疑わしい	エ	～を詰め込む
オ	時間のかかる	カ	期待	キ	～と主張する	ク	洗練
ケ	自己矛盾	コ	ストレスが多い	ク	消費	シ	職業
ス	規律	セ	～を操作する	ソ	職場		

/15

regulation		countless		incredibly	
unwanted		youngster		suburb	
inefficient		annually		obscure	
nonetheless		install		inevitable	
construction		prohibit		astronomy	

ア	郊外	イ	非効率な	ウ	法規	エ	～を取り付ける
オ	天文学	カ	～を禁止する	キ	避けられない	ク	1年に
ケ	数えきれない	コ	～をぼんやりさせる	ク	若者	シ	それにもかかわらず
ス	信じられないほど	セ	不要な	ソ	建設		

/15

boundless		overwhelm		fundamentally	
endure		embrace		surge	
gadget		bulky		poll	
resident		substitute		portion	
reluctantly		respondent		illuminate	

ア	～を受け入れる	イ	部分	ウ	代用品	エ	住人
オ	急増する	カ	回答者	キ	持続する	ク	いやいやながら
ケ	基本的に	コ	圧倒的な	ク	～を照らす	シ	世論調査
ス	かさばって	セ	小道具	ソ	無限の		

/15